

杏林大学 H29年度 テーマⅢ（高大接続）
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

H29 テーマⅢ（高大接続） 具体的な実施計画

- ① 4月 アドバンスドプレイスメントを開始する。
- ② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。
- ③ 4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。
- ④ 4月～3月 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」と「第3次中期計画実行委員会（高大連携推進実行部会）」との連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ⑤ 4月～3月 SG指定校・グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。
- ⑥ 4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。
- ⑦ 4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。
- ⑧ 4月～3月 アドバンスドプレイスメントの複数大学での実施のために他大学との関係づくりを行う。
- ⑨ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」の改修を行い、入試選抜方法としてどのように使用するかを公表する。
- ⑩ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る。
- ⑪ 5月～7月 年次事業報告書（平成28年度分）の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。
- ⑫ 7月 本学と連携高等学校合同による教員研修（FD）を実施する。
- ⑬ 7月～9月 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」にて平成28年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、平成29年度以降の改善計画の検討を開始する。
- ⑭ 8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する（ピアサポート実施を含む）。
- ⑮ 2月～3月 平成30年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の案内リーフレットの作成・印刷・送付を行う。

H29 テーマⅢ（高大接続） 具体的な実施内容

- ① アドバンスドブレイスメントの連携高校（現在9校）に呼びかけ、春学期・秋学期開講科目の高校生の履修、単位認定を実施し、単位認定に協力する連携大学を増やしていく。
- ② ライティングセンターの運営により、本学学生ならびに連携高等学校生徒を対象に、集中的に英語・中国語のライティングスキルを涵養する。留学時に要求されるライティング能力を養成するとともに、留学資料の準備等におけるサポートも行う。
- ③ 各種広報媒体を充実させ、タイムリーな情報を発信することにより、本事業の周知ならびに持続的実施の基盤を構築する。広報を担当する幹事校に対し積極的に協力していく。
- ④ 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」と「第3次中期計画実行委員会（高大連携推進実行部会）」との連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ⑤ 杏林APラウンドテーブルを継続開催し、SG指定校・グローバル人材育成取組校等と実質的な連携協議を行い、パートナーとなる高等学校と目的を共有し、協力可能性を把握する。これにより高大接続・連携を強化・拡大する。
- ⑥ 高校生・大学生を対象に、ライティング・プレゼンテーション等の自己表現能力向上のための各種セミナー、プレゼンテーションコンテストを実施し、高校生・大学生の主体的学修意欲を喚起し、留学を契機にしてグローバル人材に成長する学修過程を支援する。
- ⑦ 本事業推進に係る教務的措置の定期的点検を行いながら、ライティングセンターの高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化の効率的かつ効果的な事業運営を行う。
- ⑧ 高校生の利益となり新しい高大接続の在り方に沿った本格的なアドバンスドブレイスメントの実現に向け、本学でアドバンスドブレイスメントによって修得した単位の入学後認定を行う協力大学を、具体的協議を進めながら首都圏の大学だけでなく地域の拡大を図り、制度の有効性を高めていく。
- ⑨ 本学で開発した「グローバルルーブリック」は、「学力の二要素」のうち、評価測定の難しい「主体性・多様性・協働性」を指標・項目として取り入れたものである。語学力に関しては、「読む」「聞く」だけでなく「書く」「話す」も含めた四技能を、CAN-DO方式で評価する指標・項目を盛り込んでいる。平成30年度入試において、事業取組学部である外国語学部において、Aの入試（あるいは推薦入試）で選抜方法として採用することを決定しており、具体的な選考方法
- ⑩ 本事業のパートナーとなる高等学校（重点連携校）を継続選定し、グローバル人材育成連携協定を締結することにより、平成29年度以降の高大接続体制を整備する。
- ⑪ 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」で本年度の事業実施内容ならびにその評価を総括することにより、年次事業報告書（平成28年度分）を作成する。作成した報告書を連携高等学校等に送付するとともに、その内容を本事業特設サイトでも公開し、広く事業の成果を公表する。
- ⑫ 本事業における教育内容・教育方法・教育成果等に関する発展的連携を推進するミーティングを兼ね、今後の有機的連携に向けた合同教員研修（FD）を実施し、具体的で実質的な取り組みを策定するための意見交換を行う。
- ⑬ 平成28年度年次報告書をもとに「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」（委員長：学長）から選出されたメンバーと「外部評価委員（高等学校関係者、有識者）」において、平成28年度の事業の点検・評価を行い、平成29年度以降の改善策を検討する。
- ⑭ 連携高等学校生徒を対象とする「日英中トライリンガルキャンプ」「英語キャンプ」を実施する。本学外国語学部英語学科、中国語学科、観光交流文化学科在学生、中国からの留学生もピアサポーターとして参加し、ともにグローバル人材を目指す若者が継続的に協力し合うことができるコミュニティの形成を図る。
- ⑮ 平成30年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の各コンテンツを紹介するリーフレットを制作し、高校生・高等学校関係者への周知と参加を促す。

<p>(補助対象期間中に行った事業の内容を具体的に記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)</p>	<p>(学生教育の観点での成果を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)</p>
<p>① 4月 アドバンストプレイズメントを開始する。</p> <p>本年度までの準備段階として、大成高校、順天高校 (SGH指定校)、神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校、武蔵村山高校、調布南高校、府中東高校、藤村女子高校の9高校と「アドバンストプレイズメントに関する覚書」を締結した。学則・規定等を整え、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部25科目、外国語学部37科目の68科目を対象科目としてアドバンスト・プレイズメントを開始した。本年度中に桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度構築を図った。29年度の実績としては、高大連携締結校でもある大成高等学校より春学期5名、秋学期1名、合計6名の履修登録があり、このうち4名がアドバンスト・プレイズメントで単位を修得した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全学的アドバンスト・プレイズメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけでなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものに行えるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。 ・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。
<p>② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。</p> <p>H28年4月 井の頭キャンパス移転と同時に移設したライティングセンターが本年度も継続的に稼働し、新任のジェイソン・サマービル特任講師によるワークショップで訓練を受けた大学生9名がピアチューターとして、大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。</p> <p>H29年4月 ライティングセンターと授業の連動に関して、平成27年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセンターの積極的な利用を学生に奨励すること、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。</p> <p>H29年6月14日・21日・28日の3週連続でパラグラフの書き方、7月12日・19日の2週連続でエッセイの書き方をテーマにした「英語ライティング・ワークショップ」がジェイソン・サマービル講師によって開催され大学生が多数参加した。</p> <p>H29年9月10日、10月15日、11月19日の土曜日に、高校生向け「英語のアカデミック・ライティングセミナー」を開催した。</p> <p>H29年11月29日、12月6日の2週連続でジェイソン・サマービル講師による「Eメールライティングワークショップ」が開催され大学生が参加した。</p> <p>H29年10月～11月の合計5回の「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催されBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に取り組んだ。</p> <p>H29年6月～11月 ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全2回を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。順天高校、藤村女子高等学校、関東国際高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ジェイソン・サマービル特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。このほかオープンキャンパスでも高校生に指導を行った。</p> <p>H29年9月～H30年3月 平成30年度のピアチューターの募集を開始し、書類審査ならびに面接を行って、候補者を決定した。内定した候補者はライティングセンターの活動を見学した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。 ・ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの間で協力、調整が行われたことで、指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数・実施した個人チューターセッション回数ともに、センターの稼働率を高水準で維持することに成功した。 ・ライティングセンターでのセッション数は春学期120、秋学期91の他、ワークショップで大学生21人、ライティングセミナーで高校生18人、オープンキャンパスで高校生85人にのぼる。また大学生の通常講義での出張指導を97人が受講した。 ・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」「Eメールライティングワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。 ・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。 ・「ライティングセミナー」では、1回目はSimile and Metaphor (直喩と隠喩)について学び、「つまらない詩」を「面白い詩」に自分で書き換えることと表現方法を習得した。また2回目は、自分の関心と英語レベルにより「Postcard Writing」「Report Writing」「Entrance Exam Writing」から選び、自身のライティングスキルの指導を受けた。参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。 ・平成30年度に向けて早期より次年度ピアチューターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への引継ぎがスムーズとなり、平成29年度の活動を停滞させることなくそのまま維持することが可能となる。
<p>③ 4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。</p> <p>H29年4月～H30年3月 特設サイトを通じて、杏林APラウンドテーブルなどの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語カラオケ・吹替大会」、「IELTS対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐFD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。</p> <p>H29年4月～H30年3月 医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・7月に実施した「第4回高校と大学をつなぐFD/SD」では、大学教職員148名が参加し、「地域連携による学びの共有と高大接続」というテーマについて、共愛学園大学前橋国際大学の森昭生学長による講演が行われた。 ・8月の夏期休暇を活用して実施した2泊3日の「英語キャンプ」では、17名の大学生と8名の高校生が参加し、大学生とともに英語の集中特訓に取り組んだ。 ・8月の夏期休暇を活用して実施した「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では計20名の高校生が参加し、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。 ・10月に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語朗読・プレゼンテーション大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生5名、「中国語カラオケ・吹替大会」に高校生1名が参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。 ・H29年10月21日から毎週土曜日6回連続で実施した「IELTS対策講座」では、6名の杏林大学生に高校生41名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。 ・3月に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では計30名の高校生が参加し、英語や中国語を通じた留学生との交流、及び、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。 ・総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援など、他学部でも個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学を持つ教育資源をより広範囲にわたって高校側に提供することができている。

<p>4月～3月「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」と「第3次中期計画実行委員会(高大連携推進実行部会)」との連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。</p> <p>H29年4月～H30年3月 高大接続推進委員会と全学的な「高大連携推進実行部会」との連動を継続し、双方の委員会の情報共有の促進、協力体制の強化、プログラムの調整をより綿密に行ったことに加え、キャンパス移動を通じて4学部のスムーズな連携が可能になったことで、AP補助事業の全学的な波及に結びついた。</p>	<p>・本補助事業で定期的に行っているイベント以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、保健学部による順天高校へのDNA関連技術・生物英語の演習、さらに、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高校との連携機会の拡大にも結びついた。</p>
<p>⑤ 4月～3月 SGH指定校・グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。</p> <p>H29年5月 第9回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校の12校15名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。</p> <p>H29年11月 第10回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、日出学園高等学校、藤村女子高等学校、都立羽村高等学校、都立調布南高等学校、都立府中東高等学校の12校が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。</p> <p>H30年2月 第11回杏林APラウンドテーブルを杏林大学井の頭キャンパスで開催し、聖徳学園高等学校、順天高等学校、関東国際高等学校、都立三鷹中等教育学校、都立青梅総合高等学校、大成高等学校、県立神奈川総合高等学校、日出学園高等学校、都立武蔵村山高等学校、都立羽村高等学校、明治学院東村山高等学校、藤村女子高等学校、都立調布南高等学校に都立杉並総合高等学校を加え、計14校20名が参加して、杏林大学の教職員と活発な意見交換を行った。</p>	<p>・第9回杏林APラウンドテーブルにおいては大学が提供する英語・中国語の各種イベントのレベルの問題や、英語教育の目的や高校と大学の英語教育の違いがどうあるべきかなどの根本的な問題提起が高校側からあり活発な意見交換が行われた。アドバンスドブレインメントについては、通いによる障壁を除くにはオンライン授業ができれば高校生に勧めやすいとの意見が高校側からあり、今後の検討課題を得た。</p> <p>・第10回杏林APラウンドテーブルにおいては、既に実施された多様な高校生・大学生向けの学修イベントの結果報告と高校側からのフィードバックを受けました。例えば高校では初学者ばかりの中国語では、スピーチコンテストなどの堅い催しより軽い導入的な機会が良いとの高校側からの昨年度の意見で、今年度は中国語カラオケ大会・吹替大会を行ったことが高評価を得た。高校側でのグローバルワークに参加したジェイソン特任講師のワークショップでは、スマホを使った英語学習が行われ、高校生のみならず教員に対してもこのような学習機会が役立つとフィードバックを受けた。中国事前研修では、高校生の動機づけに大変役立ち、帰国後のフォローアップもしていただきたいとの要望が出され、今後の検討を得た。</p> <p>・第11回杏林APラウンドテーブルにおいては、連携高校が14校ともなると杏林大学の負担も大変なので、大きな学習イベントを開いて複数の高校の高校生や大学生が交流しながら学べる機会をつくれれば、主体性や多様性、協働性といった要素も含んだとても良い高大接続の学習機会にできるのではないかと建設的意見を得た。また、次年度は事業開始から5年目を迎えるので、高校と大学の連携によるシンポジウムなども行っていただきたいという要望があり、学習イベントやシンポジウムの企画の段階から、高校と杏林大学が協働して作り上げることが期待された。受益者である高校生や大学生、ひいては高校・大学の教職員の技能向上も含めた密接な高大接続の実現が可能となる。</p>
<p>4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。</p> <p>H29年7月、杏林大学井の頭キャンパスにてグローバルAPセミナーを開催。夏の中国北京研修に参加する聖徳学園高等学校の生徒9名に対して行われた。「中国」をテーマとした模擬講義と同時通訳ブースの見学を通じて研修準備と大学での学びに対しより一層の理解を深めることを目的としている。</p> <p>H29年7月、クラーク記念国際高校1年生115名と高校教員5名が井の頭キャンパスに来校し、外国語学部教員によるグローバルAPセミナー（「皆さんは英語のことをどれだけ知っていますか？」）を受講。また、神奈川総合高校でスノードン副学長が高校生40人と教員1人に対して、「日本のあいまいさ」のテーマで英語と日本語による講演を行った。さらに、関東国際高校でジェイソン・サマービル特任講師が、高校生40人と高校教員6人に対して、「My country, my city, and the school system」の講演を行った。</p> <p>H29年10月、都立武蔵村山高校でジェイソン・サマービル特任講師が、「英語発音ワークショップ」をグローバルAPセミナーの一環として実施し、21名の高校生が参加。</p> <p>H29年6月14日・21日・28日の3週連続でパラグラフの書き方、7月12日・19日の2週連続でエッセイの書き方をテーマにした「英語ライティング・ワークショップ」がジェイソン・サマービル講師によって開催され大学生が6人が参加した。</p> <p>H29年11月29日、12月6日の2週連続でジェイソン・サマービル講師による「Eメールライティングワークショップ」が開催され大学生3人が参加した。</p> <p>H29年10月～11月の合計5回の「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催されBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に7人の大学生が取り組んだ。</p> <p>H29年6月～11月 ライティングセンター主催の「ライティングセミナー」全2回を杏林大学井の頭キャンパスで実施した。順天高校、藤村女子高等学校、関東国際高等学校、武蔵村山高等学校などから高校生が参加し、ジェイソン・サマービル特任講師や大学生ピアチューターから英語ライティングに関する指導を受けた。高校生18人が参加した。</p> <p>H29年10月、「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替大会」を高大接続の形で実施。「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生5名、「中国語カラオケ・吹替大会」に高校生1名が参加。</p>	<p>・グローバルAPセミナーでは、「中国」をテーマとした模擬講義と同時通訳ブースの見学を通じて、中国全体と北京についての概要、また中国語の基本について理解し、大学での学びに対しより一層の理解を深めることをできた。</p> <p>・グローバルAPセミナーでは、英語の歴史や現状、世界で用いられている様々な英語等について、クイズ形式の質問に答えながら理解を深め、さらなる学習への動機づけを与える機会となった。</p> <p>・英語発音ワークショップでは、L/R,V/B,S/THなど日本人が苦手な発音の違いなどについて、実際に口の作り方や舌の位置などに気を付けながら声に出して学習、コミュニケーション力の向上につながった。</p> <p>・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」「Eメールライティングワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。</p> <p>・「ライティングセミナー」は、1回目はSimile and Metaphor(直喩と隠喩)について学び、「つまらない詩」を「面白い詩」に自分で書き換えること表現方法を習得した。また2回目は、自分の関心と英語レベルにより「Postcard Writing」「Report Writing」「Entrance Exam Writing」から選び、自身のライティングスキルの指導を受けた。参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。</p> <p>・「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替大会」では、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。</p>

<p>⑦ 4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。</p> <p>H29年8月21日、22日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目A「口語中国語」を開講。5名の高校生と33名の在学生在が受講。</p> <p>平成29年8月23日、24日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目B「英語をとりまく多彩な学問」を開講。14名の高校生と65名の在学生在が受講。</p> <p>H29年8月25日、26日の2日間にわたり、杏林大学井の頭キャンパスにて「大学教養レベル夏季集中講座」の科目C「詐欺罪の国際比較」を開講。1名の高校生と28名の在学生在が受講。</p> <p>H29年4月～3月 グローバル関連科目50科目、COC関連科目12科目を開講し、それぞれ、延べで4,147人、849人の在学生在受講者があった。</p>	<p>・「口語中国語」では、中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて会話表現や中国語検定対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には中国人留学生が加わり、発音指導や異文化交流を楽しみながら会話練習などを行った。2日目の午後にはグローバルAPセミナー「同時通訳ブース見学会」を合わせて開催し、大学での学びの深化を体験することができた。</p> <p>・「英語を取り巻く多彩な学問」では、外国語学部所属する8人の教員から、英語の歴史や英日の発音アクセントの違い、翻訳実務の内幕、英語と観光の関係、さらにはアニメ映画の字幕の工夫にいたるまで、多岐にわたる講義を受講し大学での多彩な学問領域に触れる機会を得た。</p> <p>・「詐欺罪の国際比較」では、オレオレ詐欺やマルチ商法なども含め、日本の詐欺罪の特徴とその国際比較を行い、アメリカやドイツの詐欺規程の基本論点に関する講義を受講し、法律というものをグローバルに見る視点の素地を身に付ける機会となった。</p> <p>・多くの在学生在がグローバル関連科目やCOC関連科目で学修することによって、杏林大学の目指すグローバル人材育成と地域指向の双方の視点から、さまざまな学修内容を多角的に学ぶ機会となった。</p>
<p>⑧ 4月～3月 アドバンストプレイズメントの複数大学での実施のために他大学との関係づくりを行う。</p> <p>H29年3月に桜美林大学、5月に共愛学園前橋国際大学、9月に創価大学と「アドバンストプレイズメントに関する単位互換協定」を締結し、以後この連携4大学でアドバンスト・プレイズメントの単位互換を実施していくことになった。</p>	<p>・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。</p>
<p>⑨ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」の改修を行い、入試選抜方法としてどのように使用するかを公表する。</p> <p>H29年5月 学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力(話す力(対話力+プレゼンテーション力)、聞く力、書く力、読む力)」に関するルーブリックを作成し、HP上で公開。同時に、平成30年度外国語学部AO入試第Ⅱ期(グローバル型)でルーブリック・小論文による事前資格審査、ルーブリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表。</p>	<p>・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着的た能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。</p> <p>・導入初年度であり、選考日を12月2日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員10名に対し、志願者15名、合格者5名という結果となった。</p>
<p>⑩ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る。</p> <p>H30年3月 杏林大学井の頭キャンパスにおいて日出学園高等学校と高大連携協定を締結し、今後も連携を深めていくことを確認した。</p>	<p>日出学園は、幼稚園から高等学校までを有し、国際化の浸透により変革する新しい社会の要請に応える人材育成を目指した少人数教育を実施しており、杏林APラウンドテーブルの場にも早い段階から出席している高校。現在、本学外国語学部の教員が出向き、高等学校における英語教育に関して、様々なアドバイスなどを行っているが、今後さらに広範な高大連携を実施していくことで双方の同意が得られた。</p>
<p>⑪ 5月～7月 年次事業報告書(平成28年度分)の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。</p> <p>H29年5月～7月 事業報告書(平成29年度分)が完成し、特設サイトで公開するとともに、外国語学部・総合政策学部の専任教員、医学部・保健学部の全教授に1部ずつ配布した。また、連携高等学校9校、愛知県から北海道までのSGH校92校、AP事業採択大学28校に送付した。</p>	<p>・広く杏林大学のAP事業の取組を大学の内外に周知することで、学内では、外国語学部だけでなく、医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義などが継続して行われていることについて情報共有がなされると同時に、杏林大学の本事業の取組の学外での認知度も大いに向上した。</p>
<p>⑫ 7月 本学と連携高等学校合同による教員研修(FD)を実施する。</p> <p>H29年7月 「第4回 高校と大学をつなぐFD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。共愛学園前橋国際大学の森昭生学長から「地域連携による学びの共有と高大接続～共愛学園前橋国際大学の事例～」と題して講演があり、その後、参加した杏林大学の教職員148名との間で活発な質疑応答・議論が行われた。</p>	<p>・「KCGポートフォリオ」を用いて、実践型の学習を可視化しキャリアへの接続を図りながら、高校でも求められているアクティブラーニングのニーズにも応えていくことで高大接続を図る先駆的な取組をしている前橋国際大学の事例を聴き、本学の取組をさらに発展させるための参考となった。</p> <p>・杏林大学への期待として、MOOCを利用して、杏林大学と地方高校、地方大学がアドバンスト・プレイズメントで結びつき、都内の高校も参加する「地方創生に寄与する都心大学モデル」と「先端の高大接続型入試モデル」の提案がなされ重要な検討課題となった。</p>
<p>⑬ 7月～9月 「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」にて平成28年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、平成29年度以降の改善計画の検討を開始する。</p> <p>H29年9月 杏林大学三鷹キャンパスにて3人の外部評価委員として、中学・高等学校の校長(高校教育全般)、大学教授(英語関係)、高校教諭(中国語関係)を招いて大学教育再生加速プログラム(AP)テーマⅢ(高大接続)の第三者評価委員会を開催した。</p> <p>H29年9月 AP推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。</p>	<p>・高校教員と大学教員を経験した委員から、「実際に英語や中国語を使い仕事をしている卒業生や社会人からの話を聞けば、言語を使う仕事のビジョンが明確になり職業選択に繋がるので、そのような試みを発展させてほしい」という建設的意見を受けた。</p> <p>・中国語の高校教員の委員からは、「事業報告書の中でもう少し具体的に生の学生の声を取り上げた方が良いのではないか。参加者の感想は、参加する前と参加した後の変化や成長が示されるような提示があると活動の成果がより伝わりやすいのではないか」という指摘を受け、同月のAP推進委員会で具体的な改善策を検討した。</p>

<p>8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する(ピアサポート実施を含む)。</p> <p>H29年8月6日から8日までの2泊3日で、高尾の森わくわくビレッジにおいて、杏林大学の英語キャンプを実施。17名の大学生と8名の高校生が参加し、英語の集中訓練が行われた。</p> <p>H30年3月24日・25日の1泊2日で、「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターで実施。本学在学学生10名(チューターとして参加、うち3名は留学生)、本学教職員9名、高校生30名が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。</p>	<p>・「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。</p> <p>・「日英中トライリンガルキャンプ」では、高校生30名に加え、留学生3名を含む大学生10名が参加し、「オリンピック」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、東京オリンピック開催を控え、様々な競技を取り上げ、競技の歴史や異なる文化圏での選手育成方法を比較し、多様性を認識し相対化する重要な機会を得た。また、主にサポート役を担った大学生側も高い意識を持つ高校生に刺激を受け、自身の語学力向上、異文化理解に基づいた協働の必要性の認識を新たにした。</p>
<p>2月～3月 平成30年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の案内リーフレットの作成・印刷・送付を行う。</p> <p>H30年1月 平成30年度に実施するイベント案内のリーフレット作成について制作会社と打ち合わせを行い、各イベントのスケジュールを確定した。</p> <p>H30年2月 校正を行いイベント案内のリーフレットが完成した。連携校15校、SGH校91校、AP採択大学77校に送付した。</p>	<p>・本リーフレットの作成・印刷・送付(配布)により、平成30年度の本事業の予定について重点連携校に周知徹底を図るとともに、平成30年度の本学新入学生に対し本事業の概要及び主要プログラムの具体的内容について入学段階から明確に提示することが可能となる。</p>

(注) 交付申請書の「補助事業の目的・必要性」、「本年度の補助事業実施計画」と対応させて分かり易く記入すること。